

行列の階数

任意の $m \times n$ 行列 A は行と列の基本変形により

$$\begin{array}{c} A \\ m \times n \text{ 行列} \end{array} \xrightarrow[\text{列基本変形}]{\text{行基本変形}} \begin{pmatrix} E_r & O \\ O & O \end{pmatrix}$$

と変形できる。このとき、 r を行列 A の階数とよび、 $\text{rank}(A)$ と書く。階数は $\text{rank}(A) \leq \max\{m, n\}$ を満たす。

事実

行列 A が行基本変形により

$$\begin{array}{c} A \\ m \times n \text{ 行列} \end{array} \xrightarrow{\text{行基本変形}} \left(\begin{array}{cccccccccc} 1 & * & \cdots & 0 & * & \cdots & 0 & * & \cdots \\ 0 & 0 & \cdots & 1 & * & \cdots & 0 & * & \cdots \\ & & & 0 & 0 & \cdots & 1 & * & \cdots \\ 0 & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & 0 \\ 0 & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & 0 \end{array} \right) \left. \vphantom{\begin{pmatrix} \\ \\ \\ \\ \end{pmatrix}} \right\} r \text{ 個}$$

と（簡約）階段行列に変形したとき、 $(0 \cdots 0)$ でない行の個数 r は A の階数に等しい。

行列の階数と連立方程式の解の自由度

A を $m \times n$ 行列, $r = \text{rank}(A)$ とする.

一般の 1 次連立方程式の場合

$$A\vec{x} = \vec{b} \quad (5.1)$$

- $\text{rank}(A | \vec{b}) = \text{rank}(A) < n$ のとき, 連立方程式 (5.1) は未知数の数が n 個で式の数 r 個の連立方程式に簡約化される. すべての式に共通に含まれる未知数の数は $(n - r)$ 個であるから, (5.1) の解は無数個存在し, 解の自由度は $(n - r)$ である.
- $\text{rank}(A | \vec{b}) = \text{rank}(A) = n$ のとき, (5.1) の解の自由度は 0, つまり, 解はただ 1 つに決まる.
- $\text{rank}(A | \vec{b}) \neq \text{rank}(A)$ のとき, (5.1) は解を持たない.

斉次連立方程式の場合

$$A\vec{x} = \vec{0} \quad (5.2)$$

- $\text{rank}(A) = n$ のとき, (5.2) は非自明解を持たない.
- $\text{rank}(A) < n$ のとき, (5.2) の非自明解が存在し, 解の自由度は $(n - r)$ である.

問題 5.1. 問題 4.2, 4.4, 4.6, 4.9 の各連立方程式 $A\vec{x} = \vec{b}$ に対して, (i) $\text{rank}(A)$ および $\text{rank}(A | \vec{b})$ を求め, (ii) 階数と解の存在性, 自由度との関係 (上で述べた事) が成り立つことを確認しなさい.